

バカロレア幸福論

フランスの高校生に学ぶ

哲学的思考のレッスン

坂本尚志

日本人が不幸なのは、
哲学をやって
いないからだ!!

幸せのフレンチ・パラドックス

日本は、失業率も殺人発生率も肥満率も低いのに、幸福度だけフランスに負けている!

“バカロレア（フランスの大学入試問題）”でわかる
フランス式**幸せになる思考**のエッセンス

バカロレア幸福論

フランスの高校生に学ぶ哲学的思考のレッスン

坂本尚志

星海社

122



SEIKAISHA
SHINSHO

はじめに

フランス人は日本人より幸せです。

150以上の国や地域が対象となっている国連の『世界幸福度報告』（2016年）によれば、フランスは32位。それほど高くないと思われるかもしれませんが。

しかし、日本はその下の53位です。

世界のトップではないにしろ、フランス人は日本人より幸せということになります（ちなみに1位はデンマーク、2位はスイス、3位はアイスランドです）。

一体なぜフランス人は日本人より幸せなのでしょう？

フランスの社会は日本の社会よりも「よい」のでしょうか。

いくつかの統計を見てみましょう。

1. 失業率

2017年10月時点での日本の失業率は2.9%、フランスは9.4%です（OECD〈経済協力開発機構〉の統計による）。

失業率が圧倒的に高いのはフランスの方です。

2. 殺人発生率

2015年の人口10万人あたりの殺人発生率は、フランスが1.58件（205の国・地域のうち149位）、日本が0.31件（同197位）です（UNODC〈国連薬物・犯罪事務所〉の統計による）。

1位のエルサルバドルが108.63件と圧倒的なので、どちらも比較的安全であることは間違いないですが、フランスの殺人発生率は日本の実に5倍です。

3. 交通事故死者数

交通事故の死者数はどうでしょうか。

2015年の人口10万人あたりの交通事故死者数は、フランスが5.4人、日本が

3・8人です（交通事故総合分析センターの統計による）。

僅差ではありますが、やはり日本の方が少ないです。

4. 肥満率

成人の肥満率は、フランスは15・6%、日本は4・5%です（WHO〈世界保健機関〉の統計による）。

どちらも世界平均18・9%を下回ってはいますが、日本よりもフランスの方が明らかに高い。もちろん肥満自体は悪いことではありませんが、健康に及ぼすリスクを考えるとこの違いは重要でしょう。

今あげた数字では、どれも日本の方がフランスを上回っています。

もちろん他のデータではフランスの方がすぐれているものや、日本とフランスが同程度のものもあります。

しかし、失業、殺人、交通事故、肥満率といった、社会生活を平穩に営む上で重要な指標は日本の方がよいのです。

これらの指標に従うなら、フランスで暮らすということは、仕事にありつけず、犯罪や事故に遭う確率は高く、潜在的な病気のリスクが高い身体の状態にある可能性も高いということです。

にもかかわらず、『世界幸福度報告』のランキングはフランスの方が上なのです。

もちろん、幸福であるかどうかは客観的なデータだけで推し量ることは難しいものです。「あなたは幸福ですか？」と訊かれた時に、統計データを参考に答える人はいないでしょう。幸福は何にもまして個人的な問題であり、主観的な問題です。どれだけ絶望的な状況に置かれている人であっても、本人が幸せであるならば、その人は幸せです。

しかし、社会状況と個人の幸福は決して無関係ではありません。日本は幸福な生活を送るための条件がフランスより揃っているように思えます。にもかかわらず、フランス人は日本人より幸福なのでしょうか？

1990年代に「フレンチパドックス」という言葉がもてはやされたことがあります。動物性脂肪の多い食事をしているフランス人に、心臓疾患が少ないという逆説のことです。

幸福にもフレンチパドックスがあります。

日本よりもリスクの多い社会に暮らしているながら、彼らはわれわれよりも幸福です。それはなぜなのでしょうか？

ひとつの原因は、彼らが幸福について「学ぶ」機会があるからではないでしょうか。幸福について「学ぶ」。

それは幸福とは何かを考えることです。

フランス人は高校で哲学を学びます。哲学は文系理系を問わず必修であり、大学に入るためにはバカロレアと呼ばれる試験で、哲学科目を絶対に受けなければなりません。

そして、幸福は哲学の重要なテーマのひとつでもあります。

つまり、フランス人にとって「幸福」は、「感じる」ものであると同時に「考える」ものなのです。

その点で日本人とフランス人は異なっています。

われわれ日本人は幸福を物質的な豊かさや他人との比較で考えがちではないでしょうか。しかし、もし幸福について自分の頭で考える習慣があればどうでしょう。何を幸福と感

じるかは人によって異なります。その違いを論理的に説明できるとしたら、幸せは単なる物質的な豊かさや他人との比較とは違う、人それぞれに固有の貴重な価値になるでしょう。フランス人が哲学で学ぶのは、まさにそのような思考の訓練です。哲学的に考える技術は、幸福に生きるための武器を与えてくれるのです。

この本では、フランス人が学ぶ幸福についての哲学的思考を見ていきます。そのために、フランスの教育制度や、特に哲学教育の内容についてまず知ってほしいと思います。

そして、フランス人が自分たちの思考を表現するやり方のひとつに哲学小論文（フランス語でディセルタションと呼ばれています）というものがあることを紹介します。哲学小論文では、哲学的な問題について、議論の型に従って考え、表現することが求められます。

それこそが、フランス人が「幸せ」である秘訣のひとつなのです。

たとえば、彼らは以下のような問題について考えなければならぬのです。

「われわれは幸福になるために生きているのだろうか？」

「われわれは他者の幸福を実現する義務を持っているのだろうか？」

「死は幸福にとっての障害だろうか？」

幸福を漠然とした心の状態として捉えているだけでは、このような問題に答えることはできません。幸福であるとはどういうことなのか、われわれにとって幸福であるとはどういう意味を持つのか、そうした問いを手がかりにして、幸福について考えることが、問題に答える出発点なのです。

つまりこの本は、考えることで幸せになる方法をフランス人から学ぶことを目的としているのです。

このような「思考の型」を知り、「幸せ」についてのさまざまな哲学的考え方を学べば、私たちも今より「幸せ」になれるのではないのでしょうか？

簡単にこの本の構成を説明しておきます。

第1章では、高校生が受験するバカロレア試験がどのようなものかを見ていきます。バカロレア試験は高校の修了資格を取得するための試験であり、合格すると大学に入学することができます。哲学は初日の最初の受験科目です。

第2章では、哲学試験で必要とされる哲学小論文の答案の書き方を扱うとともに、そこ

から私たちにも役立つ思考のヒントを見つけだします。

第3章では、フランスの高校での哲学の授業で扱われる「幸福」に関するさまざまな哲学的な考え方を紹介します。

第4章では、バカロレア哲学試験で実際に出題された幸福に関する問題を解きながら、思考のプロセスを追体験していきます。

幸せとは何か、という問題に、誰もが納得できる形で答えることは容易ではありません。しかし、幸せについて考える方法を学び、それによってそれぞれが自分の幸せについて筋道立てて考えられるようになること、それがこの本の目的です。

目次

はじめに 3

Chapitre 1

フランス人は大学に入るために、幸福について考える
バカロレア哲学試験とは何だろうか？ 19

フランスの「大学入試」バカロレア 20

コースで中身が大違いのバカロレア 22

バカロレア試験の歴史 24

フランスのテストはみんな20点満点 26

フランス人だって哲学には苦勞している 29

バカロレア、最初の科目は哲学！——4時間の筆記試験 30

高校3年生は「哲学漬け」 33

哲学教育のカリキュラム——しっかり哲学を学ぶ 36

バカロレア試験出題数ランキング——「自由」が僅差で第一位 43

Chapitre 2

「思考の型」を身に付けて「自分で考える」ようになる

バカロレア哲学試験で学ぶ思考の方法 47

学習参考書は考えるヒントの宝庫 48

「思考の型」を自分のものにするために 49

何のために哲学小論文を書くのか？ 51

解答を始める前にこれだけはやっておけ！ 53

問題の分析 54

問題の細部が圧倒的に重要 56

問いかけにも「型」がある 58

問題を「問いつめる」 64

構成案は哲学小論文の設計図 69

導入、展開、結論——哲学小論文の「部品」 72

正しい引用は高得点の秘訣 74

構成案から哲学小論文を作る 77

実際の構成案を見てみよう 80

Chapitre 3

幸福とは何だろうか？

フランスの高校生が学ぶ哲学 87

幸福とは何か？ 89

アリストテレス——幸福は「最高善」である！ 89

快樂主義——幸福は快樂だ！ 91

功利主義——快樂計算と快樂の質 95

ストア派——無益な欲望を捨てよ！ 97

デカルト——ストア派の末裔 99

スピノザ——自己の存在に固執せよ 100

フロイト——人間は幸福を求めて病む 102

幸福は個人的なものか、集团的なものか？ 104

カント——幸福は個人のもの 105

ルソー——孤独こそが幸福だ！ 106

サン＝ジュスト——幸福とは新しい觀念である 108

ベンサム——最大多数の最大幸福 109

ヒューム——他者への共感としての幸福 110

幸福は人生の目的か？——カントの義務論 112

道徳の目的は幸福ではなく義務である 112

では、幸福とは何なのか？ 114

もし幸福が存在しなければ、あるいはそんなに大事でなければ…… 115

デカルト——幸福と真理のどちらが大事か？ 116

パスカル——人間は不幸から逃れて生きている 117

シヨーペンハウアー——幸福は幻影である 119

ニーチェ——生の目的は幸福ではなく力の増大である 120

まとめ 人間は幸福を求めずにはいられない 122

Chapitre 4

現代人の幸福に関する悩みを考えてみる 123

「卑劣だろうが卑劣だろうが、幸福になれば勝ちなのか？」 125

自分の幸福に貪欲であれ？ 125

幸せになるために悪いことをしてもいいのだろうか 126

幸福に関する様々な問い 128

まずは幸福の定義から 130

アリストテレスをスピノザで補う 132

「持ち上げてから落とす」テクニク 134

欲望と理性 137

幸福のための努力は無駄!? 139

「人生の目的」を考える第三の展開 143

私たちは幸福のためだけに生きているわけではない 146

「孤独のなかで幸福でいられるのだろうか？」 149

現代人は繋がりすぎている？ 149

孤独とは何だろうか 150

「地獄とは他人のことだ」 152

対立軸はひとつとは限らない 154

孤独と幸福 157

ルソーは本当に孤独だったのか 159

他者の不在は幸福を制限する 164

幸福は社会の問題でもある 165

その他の問題 169

「知ることによって幸福が損なわれることはありえるだろうか？」 169

「幸福とはもう何も欲さないということだろうか？」 170

「幸せになるためには働かなければならないのだろうか？」 170

おわりに 173

もっと知りたい人のためのブックガイド 179

Chapitre

1

フランス人は大学に入るために、
幸福について考える

バカロレア哲学試験とは何だろうか？

フランスの「大学入試」バカロレア

日本の大学入試シーズンが本格化するのが、1月半ばの大学入試センター試験であるならば、フランスの「入試シーズン」は6月です。

しかし、「入試シーズン」という言い方は適当ではありません。後で見えていくように、バカロレア試験は日本の入試とはかなり性格が違うものなのです。

バカロレアは、大学入学資格試験とか、中等教育修了資格試験と翻訳されます。

高校までの勉強を終えたということを証明する資格で、日本で言えば高校卒業資格にあたるでしょう。

しかし、バカロレアが日本の高卒資格と違うのは、それが全国一斉の試験であるということと、それ取得すれば大学に入学することができるという点です。

日本の高校では卒業認定はそれぞれの学校が行います。

一方、フランスの場合は大学入試センター試験のような全国規模（フランス本土だけでなく、海外県や海外領土、海外のフランス人学校なども含むので、ある意味全世界規模）で行われる試験によって、生徒が中等教育を修了したかどうかを認定するのです。

バカロレアに合格すると、基本的には自分の希望する大学の学部に進学できます。フランスの大学はすべて国立で、学費も安いです。学士課程なら年2万5千円程度です。

大学に入るために、高校生たちは何としてもバカロレアに合格しようと努力するのです。

しかし、大学に入ったからといって安心はできません。日本に住む私たちにとつては、入試がないというのは良いことに思えるかもしれませんが、原則として誰でも好きな大学の好きな学部に入れるということは、人気大学・人気学部には学生が集中することです。

私がフランスの大学で日本語を教えていた時代にも、学生が殺到するあまり教室に人が収まりきらなかったり、教員が足りなかったりという事態が頻発していました。教室のダブルブッキングもよく起こりました。

そうした状況で勉強を続けるのは簡単ではありません。フランスの大学では、進級する学生より留年する学生の方がずっと多いのです。

入試がないために大学に入りやすいということは、大学1年生の時点ですさまざまな不都

合を引き起こします。

とはいえ、バカロレアを取得した全員が大学に進学するわけではありません。

なかには専門学校や技術短期大学部（IUT）という実学志向の学校に進む者もいます。特に優秀な学生たちはバカロレア取得後大学に入らず準備学級という高校に併設された2年間の課程に進み、エリート養成機関であるグランゼコールと呼ばれる学校への進学を目指します。

グランゼコールは大学とは違い選抜試験があり、トップ校は非常に狭き門です。

たとえば、エコールポリテクニクという学校を卒業して企業に就職すると、彼らは最初から部長級のポストに就きます。新卒の管理職という、日本では考えられない人々が舵取りをするのがフランスという国なのです。

コースで中身が大違いのバカロレア

バカロレアに話を戻しましょう。

バカロレアには3種類あります。普通バカロレア、技術バカロレア、職業バカロレア

です。

大学進学を目指す高校生のほとんどが普通バカロレアを受験します。

技術バカロレアは、より職業に結び付いた高等教育課程に進む高校生が受験します。

職業バカロレアは高校で職業教育を受けた高校生や、就労経験のある人々のためのものです。

このうち哲学試験があるのは普通バカロレアと技術バカロレアです。

普通バカロレアはさらに三つのコースに分かれています。文科系、理科系、経済社会系です。

技術バカロレアの方も、将来進みたい仕事の分野によって、工業、農業、経営といったコースに分かれています。変わったところでは、音楽やダンスに関する職業を選ぶ高校生たちも技術バカロレアを受験します。

受験科目はどうでしょうか。

フランス語、数学、地理歴史、理科、外国語といった科目があります。彼らにとっての「国語」であるフランス語だけは高校2年生の終わりに受験することになっていますが、そ

他の科目は高校3年生の終わりに受験します。変わったところでは体育という科目がありますが、これは試験一発勝負ではなく、それぞれの高校で学年中に評価された成績が用いられます。特殊な評価方法をとる体育を除いては、どれも日本の高校生が受ける科目とそれほど変わらないでしょう。

しかし、哲学という科目の存在が、日本の大学入試とバカロレアの違いを生み出しています。日本にも倫理のような科目がありますが、バカロレア哲学試験のように長文の論述が要求されることはほぼありません。

バカロレアの種類やコースによって哲学に対する重みには差があるものの、普通バカロレアと技術バカロレアでは哲学が初日の最初の科目です。試験時間は4時間で、解答は記述式です。その内容は後で詳しく見ていくこととして、もう少しバカロレアの全体像について見てみましょう。

バカロレア試験の歴史

バカロレア試験は1808年に創設されました。

最初の試験科目はギリシャ語とラテン語の著者、修辞学、歴史、地理、哲学に関する口

頭試問だったようです。最初の合格者は31人でした。その後も同世代に占める合格者の割合（現在の日本で18歳人口に占める大学進学者の割合などを想像してもらおうといいでしょう）は非常に小さく、1880年代によく1%に達しました。

20世紀中頃からバカロレア合格者は爆発的に増えていきます。

1946年に同世代の4.4%だった合格者は、1968年には19.6%に飛躍的に増えていきます。これが第一の拡大期であるとすれば、1980年から1995年は第二の拡大期といえます。この時期合格者数は25.9%から62.7%へと伸びました。この増加には技術バカロレアの創設（1968年）と職業バカロレアの誕生（1985年）も大きく寄与しています。

そして現在、2017年のバカロレア合格者の同世代に占める割合は、実に78.9%です（普通バカロレア41.2%、技術バカロレア15.7%、職業バカロレア22.0%）。

このうち哲学の試験を受けるのは、普通バカロレアと技術バカロレアです。2017年にこの二つのバカロレア取得者が同世代人口に占める割合は、先の統計によると56.9%です。

2016年度の日本の高等学校卒業生の現役大学進学率が54.8%（平成28年度学校基本調

査)であることを考えると、日本の大学進学者が全員哲学を履修し、試験を受けているとイメージすればちょうどよいでしょう。

フランスのテストはみんな20点満点

次にバカロレア試験の評価方法について見ておきましょう。

バカロレアに限らず、フランスの試験は20点満点で採点されることがほとんどです。

合格点は10点以上。12点以上には十分に良い (*assez bien*)、14点以上には良い (*bien*)、16点以上には非常に良い (*très bien*) の評価が付けられます。10点以上12点未満の合格者には評価を表す言葉は付きません。

バカロレア試験も各科目が20点満点で採点されます。そして各科目の重要度に応じた係数によって重みづけがされ、全体の平均が算出されます。

たとえば、理科系では数学が係数7、物理・化学が係数6、哲学が係数3、文科系では文学が係数4、地理歴史が係数4、哲学が7のように、それぞれの科目の重要度が係数に反映されています。受験科目の選択等によってこの係数は変化しますが、普通バカロレアと技術バカロレアでは、哲学は必修科目であり、平均点に多かれ少なかれ影響を及ぼす位

置にあります。

一般的に、フランスの試験の採点は厳しいと言われています。2017年の合格率は普通バカロレアで90・66%とかなり高いのですが、80%以上の得点(つまり16点以上)をとる生徒は、2017年の普通バカロレアの場合では13%で、10点以上12点未満が37・3%を占めています。

技術バカロレアの場合はさらに極端です。合格率は90%を超えていますが、16点以上の得点者は全体の2・4%であり、46・8%が10点以上12点未満の評価なしの成績で合格しています。もちろん受験者の層の違いなどはあるでしょうが、バカロレアで良い成績をとることはなかなか簡単ではないのです。

では、バカロレア試験の採点はどのように行われるのでしょうか。

日本の大学入試センター試験や各大学の入学試験が基本的に大学教員の手によって作成され、採点されるのに対して、バカロレア試験の問題は、高校教員が作成し、採点します。この点からもバカロレアは中等教育修了試験として位置付けられていると言えます。

成績の発表についてはどうでしょう。

バカロレアの場合は、結果が高校や各地域の試験センターなどに貼りだされると同時に、インターネットでも公開されます。

受験者の名前と成績のリストは、誰でもアクセス可能です。点数まではわかりませんが、受験者の名前、その可否と評価が国民教育省のウェブサイトに掲載されています。

成績がこうして公開されることは、驚くことではありません。

たとえば、フランスでは中学校の成績会議には保護者代表と生徒代表が出席し、全生徒の成績を決める場に立ち会います。

たとえば、カンヌ映画祭で最高賞のパルムドールを受賞した映画『パリ20区、僕たちのクラス』（ローラン・カンテ監督、2008年）では、成績会議に出席した生徒代表が会議でのやり取りを成績の悪い生徒に伝えてしまい、そのせいで教師と生徒の関係が悪くなる様子が描かれています。

情報が洩れる危険があるのなら、生徒代表を入れなければいいのでは、とわれわれ日本人は思ってしまう。しかし、学校の成績は公開されるべきものであり、利害関係者の立ち合いのもとで決定されるべきであるという思想がそこには存在しているのです。

フランス人だって哲学には苦勞している

こうした採点システムや試験風土の中で、哲学の試験はどのような位置にあるのでしょうか？

科目ごとの平均点は公開されていませんが、哲学者リュック・フェリー（彼は2002年から2004年まで国民教育大臣も務めています）とアラン・ルノーによると、バカロレア哲学試験の平均点は20点中7点であり、これはバカロレアの他の科目の平均点と比べて4点低いということでした。普通バカロレアでは47%の答案が7点以下、そして71%以上の答案が10点以下ということですよ（ちなみに7点というのは、問題や課題文が理解できていない、というレベルである）。

たとえば数学では43%の答案が10点以下で、7点以下は19%ということを見ると、哲学の難しさは際立っています。

また、12点以上の答案も、フランス語の13%、地理歴史の15%に比べて、哲学はわずか9%と明らかに少ないです。

フランスの高校生が哲学を学んでいるといっても、全員が哲学を得意としているわけ

はありません。ほとんどの生徒が平均点に達する答案を書くことなく、他の科目の貯金でバカロレアを取得しているとも言えるでしょう。

だから、哲学を学んでいるフランスの高校生は日本の高校生よりも賢いとか、成熟しているという議論は実態を踏まえていません。哲学試験は彼らにとって高い壁として立ちただかっているし、その壁を越えられない者もまた多いのです。

しかし、なぜ哲学はそんなに難しいのでしょうか？

哲学という学問が、あまりにも多くのことを知らなければできないものだからなのでしょうか？ あるいは、数学や理科と違ってはつきりした答えがないつかみどころのないものだからでしょうか？

たぶんそうではないと私は思います。

しかし、その問いにきちんと答えるためには、まずバカロレア哲学試験と、それが評価する対象である高校での哲学の授業についてもう少し見ていかなければならないでしょう。

バカロレア、最初の科目は哲学！——4時間の筆記試験

毎年6月中旬に行われるバカロレア試験は、高校3年生にとっては高校で最後の、そし

て最大のイベントです。

ここでの成否はその後の進路の選択にも影響します。

成績は7月上旬に発表されるので、合格していればその後9月の新学期までバカンスを
楽しめるといわけです。

先に述べたように、バカロレア試験の最初の科目は哲学です。試験時間は4時間。朝8
時から12時までです。試験は記述式で、書籍などの持ち込みは認められません。高校生た
ちは自分の思考力と記憶をたよりに哲学の問題に向き合います。

では、一体どのような問題が出題されるのか見てみましょう。

普通バカロレアでは、それぞれのコースで3題の問題が出題されます。

そのうち2題がディセルタションと呼ばれる哲学小論文の問題で、問題形式は短い一文
の問いかけです。

残りの1題はテキスト説明と呼ばれる問題で、10〜15行程程度の哲学書の抜粋を読んで、
そこでどのような問題や概念が扱われていて、議論がどのような構造になっているかを説
明することが要求されます。

生徒はこの3題のうち1題を選択して解答します。
以下は2017年の普通バカロレアの問題です。

文科系

1. 認識するためには観察するだけで十分だろうか？
2. 私が行う権利を持っていることすべては正しいのだろうか？
3. ルソー『人間不平等起源論』からの抜粋の説明

経済社会系

1. 理性によってすべてを説明することができるのか？
2. 芸術作品とは必ず美しいものだろうか？
3. ホッブズ『リヴァイアサン』からの抜粋の説明

理科系

1. 自分の権利を擁護することは、自分の利益を擁護することだろうか？

2. 自分自身の文化から自由になれるだろうか？

3. フーコー『思考集成』からの抜粋の説明

一読して、おそらく「こんな問題を高校生が解くのか！」と思うのではないのでしょうか。哲学小論文のどの問題も、一体どうやって解答すればいいのか、そもそも何を書いたらいいのかわからない、というのが多くの日本人の反応ではないかと思えます（もしかするとフランスの高校生の多くもそうなのかもしれませんが、それはまた別の話です）。

高校3年生は「哲学漬け」

なぜこんなに難しい問題が出題されるのでしょうか？

それにはもちろん理由があります。

高校生たちはぶつつけ本番で哲学の問題を解くわけではありません。フランスの高校（リセと呼ばれる）では、最終学年に哲学の授業があります。文科系では週8時間、経済社会系では週4時間、理科系では週3時間という時間数が割り当てられています。

週8時間というのはかなりの時間配当ではないでしょうか。フランスのある高校の文科

系の時間割を見てみると、哲学の授業は1時間ないしは2時間で、平日の5日間に満遍なく履修することになっています。高校の最終学年はかつて「哲学級」と呼ばれていましたが、それにふさわしい哲学漬けの日々を高校生たちは送るのです。

では、高校での哲学の授業はどのようなものなのでしょう。

フランスの国民教育省が2003年に発布した哲学教育のカリキュラムによれば、その目的は、それまで生徒が習得してきた知識を統合しながら、考える力を鍛え、最終的には自律的かつ批判的に考え、行動できる市民となる準備を整えることです。

高校最後の一年間で行われる哲学の授業はこのような目的で行われるわけですが、具体的には何がどのように教えられているのでしょうか。

哲学を担当するのは教員資格を持った教員です。授業の内容、方法については、教員各自の裁量に任されています。基本は講義とバカロレア試験に向けた哲学小論文やテキストの説明の添削指導であることは確かですが、教員によって授業にはかなりの多様性があるようです。

フランス人が高校時代の哲学の授業を思い出して語ると、授業内容よりも先生の独特な

キャラクターについての思い出話になることもしばしばです。

そうした教育内容・方法のぼらつきが許容されている背景には、フランスの資格社会としての特徴が関係しています。

フランスでは、ある資格を取得しているということは、その人が資格にふさわしい能力を保持しており、しかもその能力は生涯にわたって維持されるものであるという考え方があります。

つまり、どのような資格でも一生ものなのです。

たとえば運転免許を取得するということは、自動車を運転する能力を生涯にわたって獲得したということです。だからフランスには日本のような運転免許の更新制度がありません。70代の女性が20代の頃の写真が貼られた免許証で運転していても何の問題もないのです。

同じことは、教員免許についても言えます。

教える資格を持った教員が教えるのだから、その内容・方法がどうであれそれはきちんとしたものであるはずだ、という想定（あるいは幻想？）のもとにフランスの教育制度は機

能しています。内容より形式(資格)が大事というお国柄は、なかなか興味深い点です。

こうした特徴は、哲学試験の採点にもあらわれています。

高校で哲学を教えた経験のある、私のフランス人の友人にバカロレア試験の採点基準についてかつて尋ねたことがあります。

彼の答えは「採点基準はないよ」という驚くべきものでした。

バカロレア試験の大量の答案は、採点担当の教員に均等に割り当てられ、各教員が採点を行います。点数の転記等には確認作業があるものの、採点の妥当性自体は問われないうことでした。

ということとは、教員の好みによって点数が上下するということも考えられるわけですが、資格持ちの人間が採点しているので信頼できる、という考え方があるために、その可能性は排除できる、と考えられているようです。

哲学教育のカリキュラム——しっかり哲学を学ぶ

教員によって授業の内容や方法の違いが大きいといっても、国民教育省制定のカリキュ

表1 哲学教育が扱う概念（文科系）

領域	概念
主体	意識 知覚 無意識 他者 欲望 存在と時間
文化	言語 芸術 労働と技術 宗教 歴史
理性と現実	理論と経験 証明 解釈 生物 物質と精神 真理
政治	社会 正義と法 国家
道徳	自由 義務 幸福

ラムには授業で取り上げるべき概念（表1）や哲学者（表2）のリスト、そして哲学的なものの見方をするのを助ける「手がかり」（表3）のリストが掲載されています。まず、概念のリストを見てみましょう。

このように、5つの領域があり、それぞれに複数の概念が割り当てられています。

試験では、たとえば「意識とは何か」とか「自由とは何か」という問題が扱われることもあるでしょうし、あるいは「主体とは何か」「理性とは何か」といった、領域自体が問題にされる場合もあります。その意味では、領域はその下に属する概念をまとめるラベルであると同時に、他の概念と同じように議論や分析の対象でもあるのです。

経済社会系、理科系はより少ない数の概念を扱うこととなっています。

この23の概念のうち、経済社会系で取り上げないものは「知覚」、「存在と時間」、「理論と経験」、「生物」の4つであり、かわりに文科系にないものとして、政治の領域に「交換」という概念が加えられています。これは経済学や経営学などのコースに進む生徒に合わせた選択です。

また、理科系で扱わないものは「知覚」、「他者」、「存在と時間」、「言語」、「歴史」、「理論と経験」、「解釈」の7つの概念です。経済社会系では扱わない「生物」が対象に含まれ、「言語」や「歴史」といった文科系のテーマと考えられる概念が扱われなくなっています。

次に、哲学者のリストをみてみましょう。

表2「哲学者のリスト」一覧

古代・中世	近代	現代
プラトン	マキャベリ	ヘーゲル
アリストテレス	モンテーニュ	ショーペンハウアー
エピクロス	ベーコン	トクヴィル
ルクレティウス	ホップズ	コント
セネカ	デカルト	クルノー
キケロ	パスカル	ミル
エピクテトス	スピノザ	キルケゴール
マルクス・ アウレリウス	ロック	マルクス
セクストス・ エンペイリコス	マルブラン	ニーチェ
プロティノス	シュ	フロイト
アウグスティヌス	ライプニッツ	デュルケーム
アヴェロエス	ヴィーコ	フッサール
アンセルムス	バークリ	ベルクソン
トマス・アクィナス	コンディヤック	アラン
オッカムの ウィリアム	モンテスキュー	ラッセル
	ヒューム	バシュラール
	ルソー	ハイデガー
	ディドロ	ウイトゲンシュタイン
	カント	ポパー
		サルトル
		アレント
		メルロ = ポンティ
		レヴィナス
		フーコー

ここにも多くの哲学者の名前が出てきて圧倒されるかもしれません。

しかし、もちろん、これらの哲学者すべてを平等に扱うということではなく、また、すべての哲学者のすべての著作を読むべしと要求されることもありません。

たとえばカントだと主著の『純粹理性批判』を全部読むというようなことは（教員にもよりますが）なく、『道德形而上学の基礎づけ』のような比較的わかりやすい本が選ばれることが多いようです。

続いて、「手がかり」のリストです。

表3 「手がかり」一覧

絶対的／相対的	抽象的／具体的
現実態／可能態	分析／総合
原因／目的	偶然的／必然的／可能的
信じる／認識する	本質的／偶有的
説明する／理解する	事実上／権利上
形式的（形相的）／物質的（質料的）	類／種／個体
観念的／現実的	同一／平等／差異
直観的／論証的	合法的／正当な
間接的／直截的	客観的／主観的
義務／制約	起源／基礎
（論理的に）説得する／ （感情的に）納得させる	類似／類比
原則／結果	理論上／実践上
超越的／内在的	普遍的／一般的／個別的／個体的

手がかりは、哲学的な議論で頻繁に用いられる対義語や類義語をまとめたものです。

こうした言葉の意味をきちんと理解し、適切に使用できるということは、抽象的な概念の差異を区別しながら議論できるということです。哲学だけでなく一般社会においても広く役立つ能力です。

これらの概念、哲学者、手がかりをどう教えるかは、教員の裁量に任されています。

概念別に教えることも可能ですし、いくつかの哲学書を取り上げて、そこに現れるさまざまな概念の関係を議論していくこともできますでしょう。

ただし、高校で学ぶ哲学は、大学の哲学科で行われるような哲学史的視点からの研究ではありません。哲学を専門に研究する場合、哲学者の属する学派や思想的背景や、ある概念をめぐる問題の歴史をしっかりと理解しておかなければなりません。高校での哲学は、著者の議論を哲学史の文脈から切り離れた形で扱います。

なぜなら、高校で哲学を教える目的は、哲学者を育てることではなく、哲学という知のモデルを使って自律的・批判的に思考する力を育てることだからです。ですから、哲学史の知識はあまり問題とされないのです。

バカロレア試験出題数ランキング——「自由」が僅差で第1位

ここで、バカロレア試験の出題数ベスト10を見ておきましょう。

出題傾向を見ておくことは、哲学教育の中で何が教えられ、何が重視されているかを理解する手がかりになるからです。

ランキングは1996年から2015年までの20年間で出題された992問を対象に集計しました。複数の概念が組み合わされている概念（労働と技術、理性と現実など）については、片方のみが問題に出てくることがほとんどであるため、別個のものとして集計していません。

集計対象となった概念は全部で37種類でした。なお、複数の概念が組み合わされている問題は、重複して数えています（たとえば、「芸術は真理に到達するための一手段だろうか」のような問題は、「芸術」と「真理」の両方でカウントしています）。

1位	自由	252問
2位	芸術	245問
3位	真理	236問
4位	理性	132問
5位	道徳	131問
6位	歴史	121問
7位	技術	120問
8位	正義	111問
9位	幸福	105問
10位	言語	97問

200問を超えている「自由」「芸術」「真理」の3つは重要な哲学的問題であると同時に、高校生たちがそれまで学んできたことや、持っている知識を活用しながら考えることのできる問題でもあります。

4位以下に関しても同様であり、たとえば「歴史」のようなテーマは、高校生の歴史に関する知識を哲学的に見直すという意味で、これまでの学びと哲学的思考の接点になって

います。

「幸福」は第9位です。100問超えの概念はわずか9ということもあり、バカロレア哲学試験で幸福の問題が頻繁に出題されていることがよくわかるでしょう（ちなみに最下位は「知覚」と「生物」で、どちらも21問です。「知覚」は文科系のみ、学習事項、「生物」は文科系と理科系のみ、学習事項であることも影響しているでしょう）。

出題数ランキングから見えてくるのは、高校での哲学の授業とバカロレア哲学試験が、高校生のそれまで学んできたこと、そして彼らが考えてきたことについて、哲学的問題の扱い方を通じて振り返ってもらおうという意図をもっているということです。

しかも、こうした概念が頻出であることを知り、試験に向けて対策をしていく中で、高校生たちは単なる試験対策にとどまらない思索に足を踏み入れてもいるでしょう。

この本のテーマである「幸福」もまた、高校生たちにとっては受験対策の対象である以上に、自分たちが生きる意味について考える機会になっています。

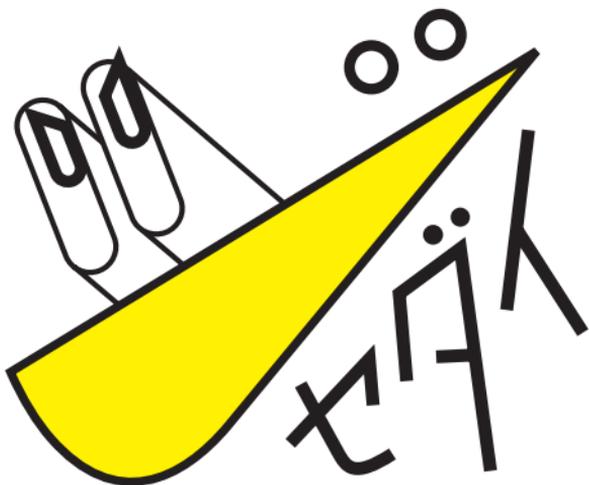
いわば、フランスの高校生は、幸福について考えないではいられない立場に置かれてい

るのです。

では、実際に幸福について哲学的に考えるとはどういうことでしょうか？

次章では、バカロレア哲学試験で必要とされる、思考の方法について見ていきましょう。

君は、



何と闘うか？

<http://ji-sedai.jp/>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!